

2 ^{もくぞうそうぎようざぞう}木造僧形坐像（^{でんじょうせんぞう}伝乗専像） 1 ^く軀 [有形文化財（彫刻）]

[所在地] 五條市西吉野町陰地 107 番地

[所有者] ^{えんこうじ}圓光寺

[法量] 像高 80.5cm

[時代] 室町時代

[概要]

五條市西吉野町に所在する浄土真宗本願寺派の圓光寺に伝来した肖像彫刻で、寺では本願寺第3世^{かくによ}覚如の高弟であった乗専（1295～1357?）の像として伝わる。乗専は圓光寺の開基とされ、寺伝では^{しょうけい}正慶2年（1333）に吉野に^{ひらお}布教し、平雄村で没したとされている。

本像は^{ていはつ}剃髪して僧衣をまとい、両手を胸前に上げて数珠をとる姿で坐す。構造は針葉樹材の寄木造りで頭部と体部を別材からつくり、頭部は箱状に組んで挿し首とし、体幹部も箱状に組んで両袖と脚部を寄せる。体部は奥行きが深く、特に胸から腹にかけての量感が非常に豊かである。鼻筋の通った面部は抑揚が少なく耳の下に膨らみを持たせる点が特徴的で、細かい木寄せを行う構造からも制作は室町時代と推定される。

寺伝では乗専が生前に自らの像をつくらせ、のちに彫刻に写したものが本像であるという。像に銘記は残らないが、圓光寺を起点として吉野に教線を伸ばした乗専の像として伝えられてきたことは貴重である。県内では中世に遡る真宗祖師彫像は希少であり、県南部における浄土真宗の展開を考える上でも高い価値をもつ像である。

